

陸機楽府詩私論

柳川, 順子

<https://doi.org/10.15017/2332604>

出版情報 : 文學研究. 86, pp.47-74, 1989-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

陸機樂府詩私論

柳川順子

陸機（二六一—三〇三）は、六朝西晋時代の代表的文学者である。元来は三国呉の名門出身であったが、二十歳の時に西晋によって祖国を滅ぼされ、およそ十年間の蟄居を経た後、故国を併呑した曾ての敵国の都、洛陽に入る。以後、かの八王の乱の渦中に四十三歳の生涯を閉じるまで、西晋王朝のもとで諸官職を歴任しながら、華麗な文辞を競い合った当時の文壇の中心メンバーとして活躍した。

さて、当代屈指の文学者たる陸機は、この時代としては比較的まとまった数の作品を今に伝えているが、作品編成上顕著な特徴として、その現存する全詩篇中、約半数に当たる三十余篇を樂府詩が占めている。樂府詩とは、この時代に即して定義すれば、漢魏の古曲もとよを本歌にして創作された歌辞だと言える^①。そして、この樂府詩は、音楽上古曲のメロディに沿うことはもとより、内容的にも本歌の主題に何らかの関連性を持たせるのが暗黙の了解となっていたらしい。そうだとしたら、作品中の「我」と作者自身とは必ずしも一致せず、そこに生身の作者の自我が現われることはないだろう。

実は、当初私は、この樂府詩という様式が予想させる匿名性に引かれて陸機の樂府詩に着目したのであった。というのも、巧緻な対句や典故表現をもって、修辭至上主義的六朝文学の筆頭に挙げられる陸機は、詠じた内容そのものがその価値を決定するような作品よりも、樂府詩のように表現の仕方にこそ獨創性が表われる、いわば純粹な言語芸術に近いものの方に、より強くその本領を發揮しているのではないかと考えたからである。ところが、私の

この短絡的勇み足の推測は見事に外れてしまった。すなわち、陸機の樂府詩と、それが依拠した古樂府とを突き合わせて検討していくうちに、意外にも、この三十余篇の樂府詩の中にこそ、彼の文學活動を根底から支えた精神的中核が埋もれているのではないか、そしてそれは、冒頭に述べたような彼の閱歴と深く関わっているのではないかと考えるに至ったのである。小論では、この一見極めて素朴なように思われる結論にたどり着いた経緯について、恣意的解釈や対象への盲目的な感情移入は極力回避しながら論述するとともに、陸機における樂府詩制作という個人的営為が、同時に、文學史上どのように位置づけられるのか、という問題についても、可能な限り考察を試みたいと思う。

ところで、本論に入る前に一つだけ確認しておきたいことがある。それは、陸機の樂府詩には、制作年代を確定できるものが皆無だということである。ただ、注目すべきことに、彼が依拠した古樂府の多くが、いわゆる相和歌の部類に属している。相和歌とは、漢代の旧歌であり、そのうちの幾つかは魏朝の宮廷音樂として採用され、そのまま西晋王朝にも継承された、いわば中原地域に伝わる古曲である。ところが一方、陸機の祖国、南方の呉では、鼓吹曲が魏朝に共通する外は、全く独自の音樂文化を育んでいたらしい^②。だとしたら、陸機の樂府詩の多くは、彼が旧里に引きこもっていた青年時代の習作だというよりも、洛陽に入って西晋王朝の宮廷音樂を實際に耳にしてから後に、その音樂に乗せて作られたと考える方が、はるかに妥当であるように思われる^③。

一

先程も言及したように、樂府詩は本歌の主題を何らかの形で踏襲するのが一般的である。とりわけ、その古曲の演奏法が既に滅びている場合は、本歌との内容的結び付きだけが、その樂府題を掲げる根拠となり得るだろうし、また音樂が健在の場合でも、概ね新辞は先行する歌辞を意識しながら作られることが多いようである。陸機の樂府

詩にも、無論そうした擬古的な作品が少なからず存在する。たとえば、次に挙げる「塘上行」^④などは、その典型的一例であろう。

江籬生幽渚、
幽渚に生じ、

微芳不足宣。
微芳、宣ぶるに足らざりき。

被蒙風雲會、
(ときに) 風雲の會するを被蒙りて、

移居華池邊。
居を華池の邊に移す。

發藻玉臺下、
藻を玉臺の下に發き、

垂影滄浪泉。
影を滄浪の泉に垂る。

霑潤既已渥、
霑潤は既に渥く、

結根奧且堅。
根を結ぶこと奥く且つ堅し。

四節逝不處、
(されど) 四節は逝きて處まらず、

華繁難久鮮。
華の繁れるも久しく鮮やかなるは難し。

淑氣與時殞、
淑氣は時と與に殞ち、

餘芳隨風捐。
餘芳も風に隨ひて捐る。

天道有遷易、
天道には遷易有り、

人理無常全。
人理として常に全きは無し。

男歡智傾愚、
男は、智きが愚かなるを傾くるを歡び、

女愛衰避妍。
女は、衰へたるが妍しきを避くるを愛む。

不惜微軀退、
微軀の退けらるるは惜しまず。

但懼蒼蠅前。 但だ蒼蠅の前みいでんことを懼るのみ。

願君廣末光、 願はくは、君、末光を廣げ、

照妾薄暮年。

妾わたくしの暮年せまに薄るを照らしたまへ。

この樂府詩の本歌は、西晋の宮廷でも演奏されていた古樂府「塘上行」で、寵愛を失った女性の怨嗟を、民歌風な繰り返しのパターンに乗せて歌ったものである。陸機の樂府詩は、その本歌に比べると、確かに、文辞・内容ともに洗練され、より陰影に富んだものとなっている。だが、そのようなニュアンスの違いを除けば、陸機の「塘上行」は、あくまで本歌の主題に沿って作られたと言ってよいだろう。彼はこの中で棄捐せられた女性になりきり、その虚構の怨恨をいかに豊かに表現するかということに全力を傾けている。そうした中で、おのずから彼の個性が垣間見えることはあっても、書かれた具体的内容が、そのまま陸機自身に帰するとは到底考えられない。なぜなら、作者陸機の視点は、終始作品中の主人公かつ語り手である「妾」に一致し、彼がしばしば身を寄せた、その作中人物のキャラクターは、本歌によって既に与えられたものだからである。

ところが一方、陸機にはまた、このような擬古的樂府詩とは別に、やはり上述の「塘上行」と同様に一人称独自の体裁を取りながらも、その語り手のキャラクターが本歌によって何ら根拠づけられたわけではない、つまり内容的にはほとんど詠懐詩と言ってよいような樂府詩が多数存在する。それらは、同じ樂府題の先行作品いずれとも無関係に陸機自身の思いを直截に伝え、そのようにして本歌の拘束から自由になった樂府詩群は、今度は作者の自我なるものに統御されるのか、樂府題は各々異なっているのに、どの詩篇も驚くほど似通った様相を呈しているのである。

さて、このような詠懐的樂府詩は、先に提示した典型的なそれとはかなり異質な、破格の作品であるかもしれない。だが、考えてみるに、その樂府のメロディが健在でありさえすれば、替え歌の要領で、全く独創的な内容を盛

り込むことも可能であろう。事実、漢魏以降、少なくとも宮廷音楽の多くが離散する以前の西晋までは、同一の楽府題のもとに、各作家がそれぞれ異なった内容の歌辞を寄せているといった現象が確かに認められるのである。たとえば、斉の武帝時代にもなお実際に演奏されていたらしい「秋胡行」など、その典型的一例である。元來、この楽府には、その題目が示す通り、秋胡なる男とその妻との悲話に取材した古辞があったに違いない。ところが、後世その古辞は失われ、魏の武帝が神仙をテーマに新しい歌辞を作り、それを宮廷音楽として定着させると、以後、魏の文帝、曹植、嵇康、西晋の傅玄、陸機、宋の謝惠連、顔延之ら名だたる楽府詩作家が、それぞれ思い思いの主題をこの楽曲に託して詠じている。

それでは、恐らくは西晋王朝の宮廷内で聞き覚えたであろう、この「秋胡行」のメロディに乗せて、陸機は一体どのようなテーマを詠じているのだろうか。

道雖一致、道は一致すと雖も、

塗有萬端。塗には萬端有り。

吉凶紛藹、吉凶、紛藹たれども、

休咎之源。休さいはろと咎とがとの源はあらん。

人鮮知命、人、命めいを知るもの鮮すくなく、

命未易觀。命も未だ觀るに易からず。

生亦何惜、生も亦た何ぞ惜しまんや。

功名所歎。功名こそ歎ずる所なれ。

これが陸機の「秋胡行」の全文である。吉凶こもこも入り乱れ、わが命運も見定め難い多難な人生において、「生も亦た何ぞ惜しまんや。功名こそ歎ずる所なれ。」と詠ずるこの詩の主題は、他ならぬ結びの二句にあること言う

までもない。

陸機には、この「秋胡行」以外にも、本歌の主題を無視した楽府詩がかなりの数存在するが、それらは、概ね「秋胡行」と同様に一人称独自のスタイルを取り、その語り手は陸機自身に重なるという構造を持っている。そして、ほぼ陸機自身と見なしてよい、その語り手たちは、これもまた「秋胡行」と同様、功名への野心や不遇な境遇への慨嘆を、あくことなく繰り返して吐露するのである。たとえば、「日重光行」^⑤では、

日重光、惟命有分可營、

日重光、命には營むべき分有りといふと惟ども、

日重光、但惆悵才志、

日重光、但だ惆悵す、才志あれども、

日重光、身歿之後無遺名。

日重光、身歿しての後、名を遺すを無きことを。

と言い、また「月重輪行」^⑦では、

善哉古人、

善しき哉、古人は、

揚聲敷聞九服、

九服せいかいに聲めいせいを揚あげ聞きを敷ひろめ、

身名流何穆。

身名の流ること何ぞ穆うろはしき。

既自才難、

既もとより「才難」なるに自りては、

既嘉運、亦易術。

既じゅうぶんに嘉運なるも亦た術うじゆひ易し。

俛仰行老、

俛仰するまには行くゆく老いゆき、

存没將何所觀。

存か没かは將はた何の觀る所ぞ。

と、運命に見放されてばかりいる我が身の不遇を、声聞麗しき古人に引き比べて慨嘆している。そして「梁甫吟」^⑧の一節に至っては、

年命特相逝、
年命は特ひたすら相逝ぎゆくに、

慶雲鮮克乘。慶雲には克く乗りえたること鮮なし。

履信多愆期、「信を履む」として「期を愆つ」こと多ければ、

思順焉足憑。「順を思ふ」といふも焉んぞ憑るに足らん。

と、不遇な運命に絶望するあまり、常日頑固堅持しているはずの信念をも懷疑するに至っている。ところが、またその一方では、「隴西行」のように、自己の才能に対する傲慢なまでの自負をもって、

豈曰無才、豈に曰んや、才無しと。

世鮮興賢。世に賢を興すもの鮮なきのみ。

と豪語するものもある。

要するに、陸機の楽府詩のうち、本歌の主題を無視した独自の内容を持つ作品は、そのほとんどが功名への野心、及びそれが果たされないことへの慨嘆を詠じたものである。そして、これらの各作品中しきりに慷慨する主体について、陸機は外側から第三者の物語として描くことはほとんど無く、概ねは、終始その独白する主体と視点を共有することから見るに、これらの楽府詩において詠ぜられた内容は、作者陸機の肉声に極めて近いとみてほば間違いないであろう。

さて、陸機の楽府詩に、唯一自序文の伝わる「鞠歌行」という作品があるが、彼はその序文において、この「鞠歌行」という楽府題の由来を推測し、あわせて自作の楽府詩のモチーフを解説している。

按ずるに、漢の宮閣に含章鞠室・靈芝鞠室有り。後漢の馬防の第宅、トして、道に臨み、閤を連ね池を通じ、鞠城（域の誤りか）街路に彌つ。「鞠歌」とは將た此れを謂ふなるか。東阿王の詩に「騎を連ね壤を撃つ」とあれば、或ひは蹴鞠を謂ふか。三言七言。奇寶名器と雖ども、知己に遇はざれば、終に重んぜられず。知己に逢はんことを願ひて、以て焉に意を託するなり。

我々はこの文章の中に、陸機の自己の才能に対する並々なぬ自負と、知己を得て広く世に認められたいという野心とを、直接彼自身の言葉としてはつきりと読み取ることが出来る。そして、ここで陸機が自ら表明したことは、先程から例示して述べてきたこと、すなわち陸機の詠懐的樂府詩には、功名心を主題とするものが著しく多いということと、正しく符合するものである。

ところで、以上に見てきた樂府詩は、比較的短篇のものが多く、いわゆる西晋太康・元康期の文学を代表するといわれる陸機としては、修辭にもそれほど彫琢が認められない。思うに、こうした自己の感慨をそのまま詠ずる詠懐的樂府詩は、当時の社交的文壇の雰囲気には到底そぐわれない性質のものであろう。陸機は、つばやきにも似たこれら小品の樂府詩を、公的な場所での華々しい披露はほとんど意識しないまま、極めて個人的な雑感の口として書き留めていたのではないだろうか。

二

陸機の樂府詩のうち、本歌とは無關係に主題を設定した作品においては、功名への野心を詠じたものが際立って多いことは既に述べた。それでは、このように自己の感慨を直接に詠じた作品ではなく、あくまで本歌に即しながら、その既成の枠の中で彼一流の文筆を振ったものについてはどうであろうか。そこで、それらの樂府詩を、古辭及び先行作品と比較しながら吟味してみると、一見、内容的には何の新しさもないだろうと予想されたそれらの樂府詩の中に、前章において見てきた詠懐的樂府詩と響き合う要素を、相当濃厚に含んでいることが認められるように思う。

たとえば、ここに「飲馬長城窟行」^⑧という樂府詩がある。この作品は、その樂府題の明示するとおり、辺境を守る兵士たちの労苦を主題とする。ただ、この樂府の古辭は、出征した夫を思う妻の歌であって、兵役に従事する

男の立場に立つものではない。そして、陸機に先行する陳琳や傅玄の作品も、概ねは古辞の設定を忠実に襲っている。ところが、陸機の「飲馬長城窟行」では、古辞や先行作品において見られた、哀切にして甘美な愛情物語は全く姿を消し、替って、悲壮な使命感に駆り立てられる男の英雄的気概が全面を覆うのである。

驅馬陟陰山、馬を驅つて陰山に陟れば、

山高馬不前。山高くして馬前まず。

往問陰山候、往きて陰山の候に問へば、

勁虜在燕然。勁き虜は燕然に在り、と。

戎車無停軌、戎車は軌を停むる無く、

旌旆屢徂遷。旌旆は屢徂き遷る。

仰憑積雪巖、仰ぎては積雪の巖に憑り、

俯涉堅冰川。俯しては堅氷の川を渉る。

冬來秋未反、冬に來りて秋に未だ反らず、

去家邈以縣。家を去ること邈かにして以て縣し。

獫狁亮未夷、獫狁は亮に未だ夷がざれば、

征人豈徒旋。征人、豈に徒らに旋らんや。

以上は、詩の前半部分であるが、このように、陸機の描く「征人」は、夷狄の攻勢から自国を守り抜こうという英雄的使命感で胸を一杯にして、遠く故郷に残してきた妻子については、さほど切実に思慕してはいないかのよう
感ぜられる。

だが、陸機のこの作品において、それ以上に注目したいのが結びの四句である。すなわち、

將遵甘陳迹、將に甘・陳の迹に遵ひて、

收功單于旃。功を單于の旃のもとに收め、

振旅勞歸士、振旅、歸士を勞ふるとき、

受爵藁街傳。爵を藁街の傳に受けん。

一句目の「甘陳」とは、前漢元帝期に西域に使用した甘延寿と陳湯のこと。彼らは敵国の郅支單于を謀殺した功績により、各々義成侯・関内侯に封ぜられた。末句の「藁街」なる語も、この陳湯の上表文に見えるのを意識的に用いたものである。陸機は、ここにおいて詩中の兵士と一体化し、自分もこの甘・陳二人の武將にあやかりたいものと、その野心を言明している。実は、この一連の直前に、戦争を「末徳」と言い、兵器を「凶器」と言つて従軍兵士の悲哀を訴えておきながら、あたかもそれをジャンプ台にするかの如く、武勲への野心を声高らかに詠じて一篇を結ぶのである。陸機が、この結びの四句にそれ相当の力を注いだであろうことは、わずか二十字の中にはめ込まれた典故表現の濃密さからも窺われよう。三句目、「振旅」なる詩語は『春秋穀梁伝』莊公八年に出で、凱旋を言う。「勞歸士」とは、『毛詩』小雅・杖杜の序に言う「杖杜は還役を勞ふなり」を意識した言葉。また末句の「受爵」は、張衡の「南都賦」(『文選』卷四)に言う「爵を受け爵を伝ふ」を踏まえた詩語である。このようにふんだんな典故表現を用いながら、陸機は功名への野望を精魂込めて表明する。ここにおいて、兵役の苦しさも、ほのかな郷愁も、不条理な境遇へのやるせない忿懣も、全てはこの功名への大志に昇華されてしまうのである。ちなみに、「飲馬長城窟行」という樂府に功名心を詠み込んだのは、陸機が始めてである。

さて、陸機の樂府詩における、主題の偏向を示す今一つの例として、次に挙げるのは「長歌行」⁵⁾である。この「長歌行」という樂府の古辞には、時の移ろいに対する感慨を詠じたものと、神仙をテーマとするものとの二者が残っているが、陸機は前者に依っている。そして、時の流れは容赦なく一方的に進み行くものだから、若いうちから努

め勵んで後悔のないようにせよ、という人生訓に過ぎなかつた古辞を、陸機は次のごとく表現豊かに深化させている。

逝矣經天日、
逝けり、天を經る日、

悲哉帶地川。
悲しき哉、地を帶る川。

寸陰無停晷、
寸陰も晷を停むる無く、

尺波豈徒旋、
尺波も豈に徒だに旋るのみならんや。

年往迅勁矢、
年の往くは、迅きこと勁矢のごとく、

時來亮急弦。
時の來たるは、亮らかなること急弦のごとし。

遠期鮮克及、
遠期には克く及ぶもの鮮なく、

盈數固希全。
盈數、固より全きもの希なり。

容華夙夜零、
容華も夙夜に零ち、

體澤坐自捐。
體澤も坐自に捐る。

茲物苟難停、
茲の物は苟に停め難ければ、

吾壽安得延。
吾が壽も安んぞ延ぶるを得んや。

俛仰逝將過、
俛仰するまに逝き將た過ぎんとし、

倏忽幾何間。
倏忽として幾何の間ぞ。

慷慨亦焉訴、
慷慨するも亦た焉にか訴へん。

天道良自然。
天道は良に自ら然るのみ。

但恨功名薄、
但だ恨むらくは功名の薄くして、

竹帛無所宣。 竹帛に宣べらるる所無きこと。

迨及歳末暮、 歳の末だ暮れざるに迨及びて、

長歌承我閑。 我が閑を承けて長歌せん。

表現の充実度においては、もとより古辞の及ぶ所ではないが、それにも増して興味深いのは、陸機の「長歌行」には、内容的に独特の踏み込みが見られることである。すなわち、古辞の主題でもあった、推移する時間への焦燥感が、彼の場合、明らかに例の功名心と背中あわせで意識されていることである。詩の後半、彼はそれまで持ちこたえていた第三者的な叙述態度をかなぐり捨てる。そして、人間のちっぽけな力ではどうにも押し留め難い時の流れを、天命としてあるがままに受け入れようと言いはするものの、その諦観を突き破って、未だ後世に残るような功績を成し遂げていないのが心残りだと、第一人称をもって、ほとんど剥き出しに慨嘆するのである。

ところで、先に挙げた「飲馬長城窟行」は、その樂府題が極めて具体的な内容を提示しているため、同題の樂府詩を作る以上は、いきおい古辞の内容を踏襲することになるだろう。だが、この「長歌行」は、四言の「短歌行」に対して、五言の歌であることを意味するに過ぎず、しかも当時まだ実際に歌われていたらしいから、必ずしも古辞の内容に固執する必然性はない。ところが、陸機は敢えて古辞の一つを選び取り、その主題に沿いながら彼独自の世界を開陳している。とすると、一見古辞を踏襲したに過ぎないと思われた、この時の移ろいに対する慨嘆という主題自体も、実は陸機の衷心より出づる切実な思いと、深く共鳴するものだったと考えられるのではなからうか。事実、陸機は他の樂府詩においても、しばしばこのテーマに言及している。そして、その時間の推移に対する過敏さは、「長歌行」において明らかかなように、さしたる勲功も挙げ得ぬまま、空しく歳月を重ねてゆくことへの焦燥感にこそ由来すると思われる。

さて、前章にて例示した「飲馬長城窟行」や「長歌行」以外にも、陸機の樂府詩には、本歌の主題に沿いつつも、その内容的外枠をはみ出し、不意に自己の内面を露出させるものが少なくない。そして、その多くは、既に繰り返して述べてきた、彼の功名への野心と深く関わるものである。ただ、こうしたいわゆる出世欲は、多かれ少なかれ中国の歴代知識人誰もが持っているものであって、別段注目すべきことではないように思われるかもしれない。けれども、それを直接に作品の題材にするかどうかは、また別問題である。陸機の在世当時、文化の主導権は貴族が握っており、彼ら上流階級の間では、現実性の希薄な、老莊思想めいた脱俗的会話「清談」が流行していた。そして、そのような風潮と機軸を一にして、この時代、空前絶後のおびたしい数の隱者が現われている。「隠れたる者」が現われるという言語的矛盾そのままに、当時、顕彰を求めないということが称揚の対象となった。そうした中で經国済民の志を詠ずるなど全くの時代錯誤であって、当時の文学的動向を決定しさえした貴族階級の趣味とは、全然相容れないこと明白である。それでは、文学者としての名声も当然望んだであろう陸機が、内容的にはほとんど反流行的と言つてよい作品を、かくも数多く制作したのはいったいどうした訳なのだろうか。

そこで、この問題を解き明かすための一つの鍵として、陸機がその樂府詩の中で好んで用い、またその雰囲気をも端的に表現してもいる「慷慨」という言葉を取り上げてみたい。さて、『説文』（十篇下、心部）に「愴慨、壯士不得志於心」と言うように、この「慷慨」なる言葉は、悲憤に満ちた、高ぶった心理状態を詠ずる詩によく用いられる。ところが、陸機の活躍した西晋時代、この詩語は極めて限られた状況下でしか用いられていない。以下、全西晋詩の中から、この「慷慨」なる詩語を全て拾い出してみたい。まず、陸機の詩における用例である。

・慷慨亦焉訴、天道良自然。（「長歌行」）

・人皆冉冉西遷、盛時一往不還、慷慨乖念悽然。（「董桃行」）

・**慷慨**惟平生、俛仰獨悲傷。(「門有車馬客行」)

・**慷慨**惟昔人、興此千載懷。(「折楊柳」)

・存没何所觀、志士**慷慨**獨長歎。(「月重輪行」)

・長吟太山側、**慷慨**激楚聲。(「泰山吟」)

・**慷慨**臨川響、非此孰爲興。哀吟梁甫巔、**慷慨**獨撫膺。(「梁甫吟」)

・遨遊放情願、**慷慨**爲誰歎。(「擬青青陵上柏」)

・**慷慨**遺安豫、永歎廢寢食。(「赴洛」二首、其二)

・感物多遠念、**慷慨**懷古人。(「吳王郎中詩從梁陳作」)

・俯仰悲林薄、**慷慨**含辛楚。(「於承明作與弟士龍」)

・**慷慨**逝言感、徘徊居情育。(「贈弟士龍」)

・**慷慨**誰爲感、願言懷所欽。(「贈馮文龍」)

以上十四例のうち、八例は樂府詩、残る六例について見れば、一篇は擬古詩、二篇は詠懷的要素の強い行旅の詩、そして三篇は実弟及び同郷の友人に贈った詩である。いずれにしても、西晋王朝の宮廷内や有力貴族のサロン等で作られたと思われる、表向きの詩はここに含まれていない。

それでは、陸機以外の詩人についてはどうかであるうか。今、「**慷慨**」なる語を用いた詩句を、全西晋詩の中から機械的に抜き出してみると、以下の如くである。

・傅玄「白楊行」；蹇驢**慷慨**（**||**慨）、敢與我爭馳。

・傅玄「歷九秋篇、董桃行」；交觴接卮結裳、**慷慨**歡笑萬方。

・傅玄「秦女休行」；一市稱烈義、觀者收淚並**慨**忼（**||**慷）。

・張華「博陵王宮俠曲」二首、其一；歲暮饑寒至、慷慨頓足吟。

・張華「壯士篇」；慷慨成素霓、嘯吒起清風。

・張華「上巳篇」；徘徊存往古、慷慨慕先眞。

・陸雲「贈鄭曼季」四首、其二「鳴鶴」；嗟我懷人、心焉慷慨。

・陸雲「答兄平原」；統我先基、弱冠慷慨。

・陸雲、失題；明發興言、忼慨芳林。

・左思「雜詩」；壯齒不恆居、歲暮常慨慷。

・歐陽建「臨終詩」；窮達有定分、慷慨復何歎。

・盧諶「贈劉琨」二十章、其十七；慷慨遐蹤、有愧高旨。

・劉琨「扶風歌」；慷慨窮林中、包膝獨摧藏。

以上、陸機一人のそれにも満たない十三例のうち、六篇までは傅玄と張華の樂府詩である。そして三篇は陸機の実弟陸雲の詩。残る四篇は、それぞれ詩人がのつびきならない状況に置かれた時の作で、これもまた、貴族的社交界の内で生み出された作品ではない。

今、機械的に「慷慨」なる言葉を用いた詩句を列挙してみたが、もちろん各詩人によって、その言葉に含ませた意味内容は異なるし、また「慷慨」の一言をもって、一時代の詩的狀況が全面的に浮き彫りになるとも思われぬ。だが、おおよその傾向を明らかにすることはできるのではなからうか。要するに、陸機がその樂府詩において好んで用いる「慷慨」という詩語は、西晋時代、一般にはそれほど頻繁に用いられず、とりわけ文壇の中核において好まれた贈答詩や応詔詩の類には皆無である。そして、陸機自身においても、この表向きの公的な詩と個人的なそれとは、明らかに区別して意識されていたらしい。そうしてみると、この「慷慨」なる詩語の世界を好んで詠ずる

陸機の樂府詩は、当時の文壇状況の中では、かなり異質の存在だったのではないか。そして、陸機内部においても、その樂府詩は特別な意味合いをもって制作されたのではないだろうか。

このことについて、彼の「遂志賦」という作品は、極めて示唆に富む内容を持っている。この賦は、その序文によると、漢の崔篆の詩を始め、馮衍の「顯志賦」、班固の「幽通賦」、張衡の「思玄賦」等、作家がその不遇時代を乗り越えんとして制作した過去の名作を強く意識し、その系譜に自ら連なろうとして作ったものだという。

さて、このような意図の下に制作された「遂志賦」の、その最後の一連において、陸機は次のように詠じている。

要信心而委命、心を信にして命に委ぬるを要とし、

援前修以自程。前せんじんの修めしところに援りて以て自ら程のりとせん。

擬遺跡於成軌、軌みちを成すにおいて、(古人の)遺のこせし跡に擬なまひ、

詠新曲於故聲。故聲こせいにのせて、新曲を詠ぜん。

任窮達以逝止、窮達きやうたつに任せて以て逝まがき(あるひは)止まり、

亦進仕而退耕。亦た進仕しては退耕せん。

庶斯言之不渝、庶こひがはくは、斯この言の渝かはることなく、

抱耿介以成名。耿介けいけいのこころを抱きて以て名を成さん。

不遇を慰め、初志貫徹の意欲を掻き立てるための、精神的拠り所について詠じたこの一節の第四句目、彼は「詠新曲於故聲」と言っている。これは、すぐ前の「擬遺跡於成軌」という句と突き合わせて考えるに、在来の音楽に新しい歌辞を被せ、そうしてできた「新曲」を詠ずるのだというふうに通じないだろうか。もしそうだとすると、これは、外ならぬ樂府詩制作を指していることになる。そして、陸機は、自己の不遇を乗り越えるための精神的糧として、自分の思いを託した樂府詩を作っていたのではないかとの推測が可能になる。

この推測は、陸機の楽府詩において、楽府詩という第三者的な虚構の枠を打ち破つても、その作品中に作者自身が登場し、しきりに悲憤慷慨することと正しく符合するし、また、当時の文壇の社交的雰囲気からは程遠い、いわゆる功名への野心なるものをテーマとする作品が著しく多いことも、このように考えれば、すこぶる納得のいくものとなる。思うに、陸機にとつて楽府詩を作るということは、険しい現実社会からしばし魂を解き放ち、再び不撓不屈の志を取り戻すためのエネルギー再生装置であつて、晴れやかな社交的場所における文学活動の、いわば裏をなす官為だつたのではないだろうか。いくら天賦の才能に恵まれていたとはいえ、もともと南方出身の陸機が、言葉の発音を始め、精神風土全般にわたつて万事勝手の違う北方貴族社会の中で、彼の自尊心を満足させるだけの高い評価を勝ち取るためには、やはりそれ相当のストレスに日々さらされてきたことだろう。そんな陸機にとつて、自己の感慨を思う存分に詠ずることのできる楽府詩は、彼の良き理解者であつた実弟陸雲の存在とともに、かけがえのない心の支えだつたに違いない。そして、陸機のこのような詠懐的楽府詩は、社交的な表舞台でこそ違和感を生じたかもしれないが、当時の厳格な階級貴族社会の中で、何とか上流階級にもぐり込もうと切磋琢磨する、ある意味で陸機と同じ立場にあつた中流以下の弱小貴族には、相当に強い共感をもつて受け入れられたのではないだろうか。

四

陸機の楽府詩において、いわゆる功名への野心は、その根幹をなすテーマであるけれども、勿論、この一語をもつて彼の全楽府詩を覆い尽くせるわけではない。とりわけ、望郷の念や遊宦の身の憂いを詠じた作品は、従来、陸機の文学について論ずる場合、必ず言及されるテーマでもあつて、決して看過することのできないものである。それでは、陸機の楽府詩における郷愁と功名心とは、いったいどのような関係にあるのだろうか。素朴に考えると、都

で功成し名を遂げようとする野心と、自分を温かく迎え入れてくれる古里に帰りたいと思う気持ちとは、一見相對立する感情のように思われるのだが、この兩者について、陸機自身の内部ではどう折り合いをつけていたのだろうか。

さて、冒頭にも述べたとおり、呉の滅亡後十年を経て、三十歳頃に洛陽入りした陸機は、以後四十三歳でその生涯を閉じるまで、ついに一度も郷里に帰ることはなかった。そうした経歴を持つ彼が、遠く離れた故郷を思い、離別した肉親や友人を懐かしむ樂府詩を作ったのは、蓋し当然であろう。たとえば、「門有車馬客行」という作品では、はるか南方の郷里から、長江・湘水を渡ってはるばる上京して来た友人との対面場面を、次のようにドラマチックに描き出している。

門有車馬客、門に車馬の客有り。

駕言發故郷。駕して言に故郷を發せるなり。

念君久不歸。「君の久しく歸らざるを念ひ、

濡跡涉江湖。跡を濡らして江・湘を涉りきたるなり」と。

投袂赴門塗、(すなはち)袂を投ひて門塗に赴くに、

攬衣不及裳。衣は攬れども裳には及ばず。

撫膺携客泣、膺を撫ち、客と携へあひて泣き、

掩淚敘温涼。涙がほを掩ひて温涼を叙ぶ。

遠来の客を迎えるというのは、実はこの「門有車馬客行」なる題を持つ樂府自体が、本来的に備えている場面設定なのだが、それでも、旧友の到来を聞きつけるやいなや、衣服を整えるのもどかしく出迎えに行く人物を描くところ、陸機の望郷の念がいかに切実なものであったかが察せられよう。また、「悲哉行」という作品では、寄る

べなき「遊客の士」の胸の内を、次のように共感的に詠じている。

寤寐多遠念、寤めても寐ても遠きへの念ひ多く、

緬然若飛沉。緬然として飛沉するが若し。

願託歸風響、願はくは、歸風の響きに託して、

寄言遺所欽。言を寄せて、こゝは欽うやまふ所に遺おくらん。

最終句は、嵇康の「贈秀才入軍詩」(『文選』卷二十四)に言う「感悟馳情、思我所欽」を踏まえた表現であるが、陸機の他の作品の中にも、たとえば「贈馮文憲」詩に言う「慷慨誰爲感、願言思所欽」、「贈從兄車騎」詩に言う「寤寐安豫、願言思所欽」等、類似した表現を挙げることができる。これらの詩が、いずれとも離別の情を詠じていることは言うまでもない。

以上二篇の樂府詩以外にも、たとえば「苦寒行」は、「離思は固もと已とより久しく、寤さめても寐ねても與ともに言かたる莫なし」という郷愁を、この樂府が元來備えている、寒さに苦しむ兵士という主題の骨格の隙間に滑り込ませているし、^②また樂府詩以外では、上に挙げた二篇の贈答詩を始め、「贈尚書郎顧彦先」二首の其二、「答張士然」等の詩、そして、「思歸賦」「懷土賦」といった作品等に、こうした望郷のテーマを拾い出すことができる。

それでは、それほど思慕してやまぬ故郷ならば、いったい彼は何故、その望みのままに帰還しなかったのだろうか。推察するに、陸機における望郷の念は、都を離れて故郷へ引きこもりたいという願望へは決して結びつかず、むしろ、功名を求めて都に居続けるが故に生じた、つまり、彼の野心と表裏一体の感情だったのでないかと思われる。このことについては、「吳王郎中時從梁陳作」(『文選』卷二十六)という詩が有力な傍証となろう。この詩は、その題に言うとおり、吳王晏の郎中となつて梁陳の地を訪れた際に作られたものだが、陸機はこの異動によつて、都を遠く離れ、故郷に間近い淮南へ赴任することになった。ところが、意外にも、詩中そのことについては一言も

触れられず、全篇これ華やかなりし都での文人生活への追想に埋め尽くされているのである。

もともと伝統的知識人として古風なまでに生真面目な上昇志向を持っていた陸機は、不幸にも、それを異郷の地において実現するほかない時代状況に置かれていた。そこで、自己の志を貫こうとする過程において、文化的土壤を異にする西晋貴族社会との軋轢が、彼に望郷の念を抱かせたのではないだろうか。非常に自尊心が強く、狷介なところのあったらしい陸機は、常々自分を田舎者扱いする北方人士に対抗意識を燃やし、彼らと伍してゆくためには相当な虚勢を張つてもいたであろう。そんな張りつめた弦がふつと緩む、その瞬間に彼の脳裡を過ぎるのが、あの懐かしい故郷の情景や旧知の人々の顔だったのではないだろうか。だからこそ、彼の樂府詩には、功名への野心と望郷の念とを、二者択一的に対峙させて詠じたものはないし、また、故郷を遠く離れ、いわゆる曾ての敵国である西晋王朝に仕えたということ自体を後悔する内容の作品もないのである。たとえば、以下に挙げる「猛虎行」という樂府詩は、一見、遊宦の身の上を恥じ、異郷の朝廷に仕えたことを悔いているように思われる。だが、注意深く読んでいけば、そうした解釈は正鵠を得ていないことが明らかになる。

渴不飲盜泉水、 渴しても盜泉の水は飲まず、

熱不息惡木陰。 熱しても惡木の陰には息はず。

惡木豈無枝、 惡木に、豈に枝無からんや。

志士多苦心。 志士には苦心多きなり。

整駕肅時命、 駕を整へて時の（天子の）命を肅み、

杖策將遠尋。 策を杖りて將に遠く尋ねんとす。

飢食猛虎窟、 飢えては猛虎の窟に食らひ、

寒棲野雀林。 寒えては野雀の林に宿る。

日歸功未建、

(ざれど) 日は歸みたるに功は未だ建たず、

時往歲載陰。

時は往きて、歳、載に陰となる。

崇雲臨岸駭、

崇き雲は岸に臨みて駭り、

鳴條隨風吟。

鳴く條は風に隨ひて吟ず。

靜言幽谷底、

靜言す、幽谷の底、

長嘯高山岑。

長嘯す、高山の岑。

急弦無懦響、

急弦、懦れる響き無からしめんとすれども、

亮節難爲音。

亮の節は音を爲し難し。

人生誠未易。

人生、誠に未だ易からざれば、

曷云開此衿。

曷ぞ此の衿を開かん。

眷我耿介懷、

我が耿介の懷を眷て、

俯仰愧古今。

俯仰して古今に愧づ。

まず、冒頭四句に、いかなる逆境に追い込まれても絶対に邪道へは踏み込まず、あくまで節義を貫こうとする志士の心意氣を詠じているのは、次に挙げる「猛虎行」古辞を意識的に踏襲したものである。

飢不從猛虎食、

飢うるも猛虎の食には從はず、

暮不從野雀棲。

暮るるも野雀の棲には從はず。

野雀安無巢、

野雀に安んぞ巢無からんや。

遊子爲誰驕。

遊子は誰が爲にか驕りたる。

ところが、作品全体を貫くかと思われたこの主題は、第七・八句目に来て丸つきり正反対に覆えされる。その「飢

えては猛虎の窟に食らひ、寒^三えては野雀の林に宿る」という詩句は、敢えて前言を反転させている以上、險悪な状況を生き抜くために、日頃堅守してきた信念をも裏切らねばならない苦境を言つたものと解釈できよう。そして、一篇の結びに「我が耿介の懷^{おぼろ}を眷^{かへりみ}て、俯仰して古今に愧づ」と言うのは、今述べたこのこと、すなわち自己の志を実現させるにあたって、必ずしもまっとうな道を貫き通せなかつたことに対する慙愧の念を言つたものにほかならない。念のために再度確認するならば、この慙愧のもととなった「飢食猛虎窟、寒棲野雀林」とは、その句の置かれた位置から見ても、「駕を整へて時の（天子の）命を肅み」、入洛して以後の軌跡を比喩したものと見なすのが妥当であつて、「肅時命」そのこと自体を指すとは考えにくい。そして、後悔の対象が遊官それ自体でないことは、第九・十句目、かの「飢食」云々の詩句を受けて、「（されど）日は歸^{しつ}みたるに功は未だ建たず、時は往きて、歳、載^三に陰^{くれ}となる」と言い、またしても、功名への野心と、それがままならぬことへの焦躁感を吐露している所にも、明確に読み取ることができる。

さて、以上、作品中に見てきたことは、果たして彼の実生活上にもその痕跡を認めることができるのだろうか。今ここで、陸機の入洛後の足跡について少しく言及しておきたい。²⁸ 太康末年（西暦元九年）、二十九歳にして弟陸雲らとともに洛陽入りした陸機は、まず、当時の政治・文化両界の重鎮であつた張華を訪れ、彼の知遇を得て、西晋貴族界にその名を知られるようになる。翌年、惠帝即位と同時に太傅楊駿が実権を握ると、この楊駿に召されて祭酒となる。さらにその翌年、楊駿が賈后・賈謐一族のクーデターに倒れると、太子洗馬に遷り、まもなく著作郎に転ずる。そして、この間、今や権勢並び無き賈謐と交流を持ち、この権力者の下に集う文学集団、いわゆる二十四友のメンバーに加わっている。その後、三十四歳の時に、吳王晏の郎中として淮南へ赴任したが、二年後再び入京し、尚書中郎、殿中郎、著作郎を歴任。そして、この間に、賈謐との交流も復活したらしい。それから四年後の西暦三〇〇年、かつて仕えていた愍懷太子が賈后によって暗殺され、その賈后が趙王倫に廃せられ、賈謐もそれに

伴って殺されると、かの張華を始め、賈氏一族にゆかりの深かった多くの人物が連座する中、陸機はその趙王倫の下で相国参軍、中書郎を歴任。趙王倫が失脚すると、倫を討った諸王の一人、成都王穎に身を投ずる。だが、讒言によって冤罪を被り、命の恩人として頼みにしていた成都王穎にも誤解されたまま、無残な最期を遂げるのである。こうして陸機の足跡をたどってみると、多少の例外的時期はあるものの、目まぐるしく情勢の変化する権力争いの渦中で、おおよそ常に、その頂点に立つ人物の下に就こうとしていることに気付く。これでは、後世の人々に、その危うい綱渡りのような生き方を批判されるのも無理はない。^②「猛虎行」に言う慙愧の念とは、あるいはこうした一種の節操のなさに由来するものなのかもしれない。

ただ、陸機における、こうした功名へのあくなき野望の内実は、必ずしも、当時の西晋貴族社会に同化し、その中で個人的栄達を目指すといったものではなかったようである。たとえば、「君子有所思行」では直截に都人士の奢侈な生活に対して警告を発しているし、また宮廷での船遊びを詠じた「權歌行」や、美辞麗句を連ねて都の美女たちの春遊を描写した「日出東南隅行」といった作品において、彼の視点は常に対象の外側にあり、決してその内部に踏み込んで共感的に描くということをしていないことから、それは窮い知ることができない。勿論、彼も木石ではないから、そうした優雅で享樂的な生活に見向きもしなかったわけではあるまい。けれども、彼の野心の中核にあるものは、やはり、伝統的知識人精神に基づく濟世の志であったように思う。かの八王の乱のさなか、同郷の友人たちは彼の身を案じてしきりに帰郷を勧めたが、当の本人は、自己の才能を頼み、国難を救済しようという大志を抱くあまり、とうとうその忠告を聞き入れなかったという。だが、そのような生き方は、当時の処世に長けた中原人士から見ても、また結果を知る我々の目から見ても、やはり時代錯誤的で、甚だ現実離れしているとしか言いがたい。とはいえ、陸機自身にしてみれば、この濟世の志は、誠に哀心より出でた偽らざる意志であったように思われる。

五

さて、以上のように見てくると、陸機の樂府詩における制作態度は、詠懐的色彩が相当に濃厚だと言えそうである。それでは、翻つて、一番始めに言及した擬古的樂府詩については、いったいどのように理解したらよいのだろうか。作品の内容だけに限つて見れば、この種の樂府詩は本歌の設定した枠をほとんど出でおらず、その他の樂府詩ほどには、直截に彼の思いを表明してはいない。けれども、たしかに自己の内的世界の表出が必ずしも文学的目標ではないこの時代ではあるのだけれども、こと陸機に関する限りは、こうした擬古的樂府詩を、作者の自我とは全く無関係のものとして決めつけることに、私は少なからず躊躇を覚える。というのも、陸機が模擬の対象とした古樂府を見るに、やはりそこには彼の取捨選択が働いているように思われるからである。

陸機の樂府詩中、本歌の主題を忠実に踏襲したと見られる擬古的作品は、「從軍行」^②「苦寒行」^③「短歌行」^④「塘上行」^⑤「燕歌行」^⑥の五篇であるが、このうち、「從軍行」を除く四篇が、いずれとも晋樂奏する所の古樂府を本歌としてゐる点に、まず注目したい。思うに、宮廷内で実際に演奏されている樂府であれば、その歌辞は、宮廷に出入りする知識人誰もが聞き知っているはずである。そして、そのようによく知られた古樂府に新辞を付した場合、その修辭的熟練とそれに伴う内容的深まりは、古辭との対照によつて、より一層鮮やかに認知されるに違いない。もしかしたら、陸機はこのような効果をも考慮に入れたうえで擬古的樂府詩を制作し、それによる文学者としての名声獲得を目指したのかもしれない。そうだとすれば、功名心の実践成果とも言えるこれらの擬古的樂府詩は、功名心そのものを主題とする、彼のその他の樂府詩と、次元こそ異にすれ、正しく同源に出づるものと言うことができる。

とはいえ、勿論彼は、自己の文学的才能を誇示するただけにこうした擬古的樂府詩を作つたわけではなく、やはり、彼自身にとって切實に感じられる内容の古樂府のみを、その本歌に選び取つてゐるように思われる。たとえ

ば、これはその直接的証拠とはならないが、彼が依拠した古楽府には、神仙をテーマとするものが一篇もないことは注意されてよいであろう。漢魏以来、神仙はしばしば楽府詩の題材とされ、その超俗的雰囲気は、西晋貴族の間にも深く浸透していたように見受けられるのに、陸機は本歌を選択する際、潔癖なくらいそうした古楽府を避けているのである。思うに、伝統的儒教精神が根強い呉の地方に育った陸機は、人知を超越した神仙世界について、やはり今一步没入しかねる抵抗を感じていたのではないだろうか。それに対して、彼が本歌とした、従軍の苦しみや離別の悲しみを詠じた古楽府は、そのまま彼の思いを代弁してくれるものだったに違いない。そうしてみると、陸機にとって擬古的楽府詩とは、自己の文学的力量的ほどを披露すると同時に、その真率なる思いをおおっぴらに開陳できる貴重な文学様式でもあったと考えられる。

さて、以上五章にわたって述べてきたように、陸機の楽府詩三十余篇は、その本歌との関係をポイントに、幾つかの層に分けて捉えることができるが、そのいずれの位相においても、彼の功名への野心は何らかの形で姿を現している。そして、陸機の楽府詩の様々な局面において露呈するこの功名心こそが、既に第三章にて言及したように、彼の全ての文学的活動を根本から支えたエネルギー源だったのである。陸機の残した一群の楽府詩は、彼の創作活動における内的動機からその発露に至るまでの全てを、あたかも地層の断面図のようにして我々の前に提示して見せてくれると言つてよいであろう。

ところで、陸機の楽府詩においてあらわになった功名への野心なるものは、実は、陸機のみにも特有の個性ではなく、この西晋時代の文人誰もが共通して持っていたメンタリテイのように思われる。たとえば、陸機と並び称せられる潘岳にしても、十年間の歳月を費して「三都賦」を著した左思にしても、また「鶴鵠賦」をもって世に出で、陸機の才能を始めて世に知らしめたことでも有名な張華にしても、皆そうである。彼らは皆、文学的才能を元手に、上流貴族社会の仲間入りを果たした寒門出身者であつて、それだけに、作品中にそうした野暮ったい野心そのもの

を詠ずることは注意深く避けているようである。しかしながら、実は彼らもまた陸機と同様、正しくこの功名心をこそ文学活動のエネルギー源としていたのであるに違いない。そうした意味において、陸機の樂府詩は、彼個人の意図を超えて、同時代の文人たちの屈折した思いを代弁する文学作品だと言えよう。そしてまた一方、彼の樂府詩のうち、激しい上昇志向を昇華して、文学的にも高い水準に達し得た幾篇かの作品は、樂府詩史上における空白の時代、東晋時代をくぐり抜け、多くの宮廷樂曲が失なわれた後の時代の樂府詩の、今度は内容上の本歌として、模擬の対象となつてゆくのである。^⑤

注

①増田清秀氏『樂府の歴史的研究』（創文社刊、一九七五年）七頁参照。

②蕭滌非氏『漢魏六朝樂府文学史』（人民文学出版社刊、一九八四年）一六一頁―一六六頁参照。

③このことは、増田氏が前掲論著の七頁において、夙に言及しておられる。

④『文選』卷二十八、陸士衡「樂府」十七首の其十七。『樂府詩集』卷三十五、相和歌辭、清調曲。小論に引用した作品のテキストは、金濤声氏点校『陸機集』（中華書局刊、一九八二年）に拠つたが、『文選』所収のものについては、李善注『文選』を定本とした。作品説解には、郝立權氏『陸士衡詩註』（人民文学出版社刊、一九五八年）を参照。なお、陸機の樂府詩を古樂府と比較するにあつては、便宜上『樂府詩集』を用いたので、以下逐次その巻数を記すことにする。

⑤『樂府詩集』卷三十六、相和歌辭、清調曲「秋胡行」の項を参照。なお、この「秋胡行」を始め、各樂府の音樂的生命がいつ頃まで保たれていたかについては、増田氏の前掲論著（主として二二頁―二四頁）を参照した。

⑥『樂府詩集』卷四十、相和歌辭、瑟調曲。

⑦注⑥に同じ。

- ⑧『楽府詩集』卷四十一、相和歌辞、楚調曲。
- ⑨「」で括った語句は、『周易』繫辞伝上(第十一章)に言う「履信思乎順、又以尚賢也」及び同書の婦妹卦、九四爻辞に言う「婦妹愆期、遲帰有時」を踏まえたもの。
- ⑩『楽府詩集』卷三十七、相和歌辞、瑟調曲。
- ⑪『楽府詩集』卷三十三、相和歌辞、平調曲。陸機の序文は、同書郭茂倩の注に引かれて今に伝わる。
- ⑫曹植「名都篇」中の一句。
- ⑬『文選』所収十七首の其六。『楽府詩集』卷三十八、相和歌辞、瑟調曲。
- ⑭もつとも、この「末徳」「凶器」なる語は、各々『莊子』天道篇、「韓非子」存韓篇などに見え、それ自体既に伝統的表現ではある。
- ⑮『文選』所収十七首の其十一。『楽府詩集』卷三十、相和歌辞、平調曲。
- ⑯増田氏の前掲論著、一〇七頁参照。
- ⑰たとえば、「折揚柳行」「董桃行」「上留田行」など。
- ⑱『説文』は「慷」を「忼」に作る。「慷」は「忼」の俗字。句末の「於心」二字は、段玉裁の校訂により補う。
- ⑲松浦崇氏編『全晋詩索引』(権歌書房刊、一九八七年)参照。
- ⑳『文選』所収十七首の其七。『楽府詩集』卷四十、相和歌辞、瑟調曲。
- ㉑この作品は、晋樂の奏する所でもあった、魏武帝曹操の「苦寒行」に擬したものである。注㉒を参照。
- ㉒『文選』所収十七首の其一。『楽府詩集』卷三十一、相和歌辞、平調曲。その古詩は『文選』李善注に引く。
- ㉓姜亮夫氏『陸平原年譜』(古典文学出版社刊、一九五七年)参照。
- ㉔たとえば『顔氏家訓』文章篇、「文心雕龍」程器篇など。
- ㉕『文選』所収十七首の其三。『楽府詩集』卷三十二、相和歌辞、平調曲。左延年の歌辞に擬す。

②6 『文選』所収十七首の其五。『樂府詩集』卷三十三、相和歌辞、清調曲。注②①を参照。

②7 『文選』所収十七首の其十四。『樂府詩集』卷三十、相和歌辞、平調曲。魏武帝曹操の「対酒」の辞に擬す。

②8 注④を参照。本歌歌辞の作者は、魏武帝、文帝、甄皇后のいずれか、あるいは作者不明の古辞なのか未詳。

②9 『樂府詩集』卷三十二、相和歌辞、平調曲。魏文帝曹丕の「秋風」「别日」二篇の辞に擬す。

③0 たとは、上述の「長歌行」を始め、「折楊柳行」「董桃行」「日出東南隅行」などに、そうした神仙に対する意識的回避が認められる。

③1 このことは、岡村繁氏が「建安文壇への視角」（『中国中世文学研究』第五号、一九六六年）において、夙に指摘されている。

③2 劉宋以後の樂府詩で、漢魏の古樂府に直接擬したのではなく、明らかに陸機の樂府詩を意識して作られたと思われるものに、たとえば顏延之の「従軍行」、謝惠連の「豫章行」などがある。